

自立への旅立ち



実施要綱と一緒にご覧ください

南日本カルチャーセンター ホームステイ資料

研修企画
南日本カルチャーセンター

お問い合わせ・お申し込み先

旅行企画・実施 (株)南日本カルチャーセンター

〒890-0056 鹿児島市下荒田3丁目16番19号

TEL 099-257-4333(代表) お問い合わせ専用 ☎0120-212122

観光庁長官登録旅行業第1355号 (社)日本旅行業協会正会員
総合旅行業務取扱管理者 平原靖子

ホームページ www.mncc.jp

次代を担う国際人として

南日本カルチャーセンター

代表取締役 濱田 純逸

これからホームステイに参加しようとしている皆さん、おめでとうございます。

おそらく、長年、ホームステイに参加したいと思っていたにもかかわらず、いろいろな諸事情が重なって、夢でしかなかったものが、皆さん方の念願がやっと叶って夢の実現となりそうな現在、心から私もお慶びの言葉を贈らせていただきました。

私は南日本カルチャーセンターの代表取締役の濱田純逸と申します。これまで50年以上に亘って合計2万人以上の小学生、中学生、高校生、大学生に「ホームステイプログラム」を通して、国際交流の場を提供し、「異文化学習」「異文化理解のあり方」などの指導を行ってまいりました。出発準備から帰国に至るまで、これだけ多くの参加者を直接お世話していますと、様々な参加者の人生に立ち会うこととなります。参加者が申込むまでの経緯もそれぞれです。一緒に行こうねと話していた女子中学生二人の一人が家の事情で行かれなくなり、もう一人の方が参加すると聞かされ、玄関先で泣き崩れるその場に立ち会った50年前の私には、ご両親のご理解があって参加に至った皆さん方が、本当に幸せな家庭環境で生活しているのだなと感じられます。

保護者が参加に同意し、本人も行く意思があることが申し込まれる方の絶対条件です。でも、50年の歴史の中では、この条件にそぐわない参加者が何人かおります。私が忘れられない最初の人は、鹿児島県の中学3年生で参加したA君です。どうしてもアメリカに行きたかった彼は、ご両親に反対され、小学5年生から新聞配達のアパートに着手し、お金を貯めて中学3年生になった時、そのお金で全参加費用を支払って、1978年度の夏に参加し、現在57歳です。当時、この生徒の行状が新聞記事にもなっただけの話題になり、これ以降、親から反対されても自分の努力で参加しようとする生徒が増えていきました。そして、1990年代の参加者の特徴は、保護者から反対され、祖父母に懇願してスポンサーになって貰ったという事例が急拡大していったことです。更に、2000年代に入ると、地方自治体によってこの「アカデミックホームステイプログラム」の参加希望者に助成金が交付されるという「青少年海外派遣事業」制度が始まり、視点を変えれば、保護者や祖父母による費用負担だけでなく、様々な方々の支援や制度で参加できるようになり、改めて、プログラム発足50年、参加者総数2万人にも及ぶこの事業の重さと責任を痛感しております。

次に、極めて摩訶不思議と思われるような現象が一つあります。すなわち、保護者は参加させたいにも拘らず、生徒本人が行きたくないと主張して平行線をたどる事例ですが、これには不変の法則が判明しています。つまり、行きたくないと主張するのは、圧倒的に男子生徒であり、女子生徒には全く見られないということです。お姉ちゃんが3人もホームステイに参加したので、ご両親は一番下の息子さんを参加させようと思いました。お父さんは曰く、「一番参加させたかったのは、この下の息子なのですが、本人が行きたがらないので、何とか説得してもらえませんか？」このような事例は、数限りなくあります。しかも奇妙なのは、男子だけなのです。私は最高8時間かけて、男子中学2年生を説得したことがあります。そして、現地で、その生徒に参加しての感想を聞きました。すると、彼は「来てよかった。」「濱田さん、説得してくれてありがとう。」と応えてくれました。そして、私には忘れられない生徒の一人となりました。彼と同様の男子参加者は数限りなくおり、後日、何故参加するのを拒絶していたのか、何人かの男子参加者に尋ねましたが、判明したことは、「行くのが怖かった。」ということに集約されます。女子生徒は「面白そうだ、行きたい。」と言うのが通例ですが、男子生徒は「何があるか分からない。不安で怖いから、僕は行きたくもない。」と言うのが、男子生徒たちの実状のようです。この性別による一般的な相違を熟知して、保護者の皆様はお子さんと向き合うようにされることをお勧めします。

最後に、多くの参加者が参加後に、人生観が変わったとその心境の変化を話す機会を何回も耳にしました。「人生観が真逆になった」という生徒もいれば、「例えば、行く前は親に反抗的態度ばかりだった自分が、親に感謝するようになった」と、保護者を前に平然とそう喝破した男子中学生の体験談を聞く機会があり、目頭を押さえる母親の姿を見、このプログラムを毎年実施する意義と勇気を参加者から頂いております。

保護者の皆様へ

今から50年以上も前、初めてホームステイに参加する生徒たちが、九州各県の駅から出発する時、(当時は、羽田空港まで、九州から国鉄と新幹線を利用して行っておりました。)参加者と保護者が抱き合っ、人目をはばかることなく、涙を流しながら別れる光景が、各駅のどこでも見られたものでした。しかし、昨今の出発光景で、泣き別れる生徒と保護者は、どこにもいっらっしゃいません。何故、親子が涙ながらに別れていたのが、笑顔で別れるようになったのでしょうか。この変遷の中に、日本のホームステイの価値の変容が凝縮しているといっても過言ではありません。

半世紀前の涙は、アメリカに行く子も、送り出す親も、未知の世界に旅立つ不安と恐怖の涙だったのです。「ホームステイ」という言葉すら市民権のない時代ですから、言葉も分からないアメリカ人家庭で、無事過ごしてこられるだろうかという恐ろしさは、想像以上のものでした。周囲にホームステイ経験者は一人としていない、ましてや、初めて海外に行くという生徒とその保護者ばかりですから、みんな真剣に取り組んだものです。事前の英語の学習や自文化学習でも、異文化学習でも、参加者には誠実で、真摯な国際交流に臨む姿勢と意気込みがありました。

ステイ地の市長に表敬訪問に行った際、市長の英語が、ほとんど分からないにもかかわらず、ノートを片手に、一生懸命に記録を取る中学生の姿が、その象徴的なものでした。それが現在においては、説明する市長の英語をかたわらに、市長の椅子に座りながら、右手はピースのポーズでお互いに写真の撮り合いをする、そんな様子を時々目にするようになりました。誰もがホームステイという言葉を使うようになり、ホームステイ参加者が周りに溢れるようになり、着実に、国際交流の輪は広がっているのかもしれませんが。特に、観光旅行の一形態としてホームステイが実施されるようになって以来、学生時代に一度は、ホームステイや留学で海外に出かけるのは、珍しくもなく、むしろ当然といったような風潮も見られるようになりました。その結果、ホームステイは本来の民間の国際交流や異文化学習の場としての位置から離れ、「学生のための海外旅行」としての要素を内包しつつ、観光旅行化してきております。さらに、ホームステイに気軽に参加できるこの「気軽さ」が、「安易さ」に変化しつつあります。

当時、保護者は、何故、高額な参加費用を、子どもさんのためにお支払いされたのでしょうか。それは、保護者がホームステイを「異文化学習の場」と理解されていたからにはほかなりません。21世紀に生きる子どもたちには、国際感覚と英語力が必要と痛感して、ホームステイの成果に、それらのものを期待していたわけです。すなわち、ホームステイを教育的なものとしてとらえ、「かわいい子には旅をさせよ」という気持ちで、その参加費用を支出されていたのです。だからこそ、出発の時に、涙を流して別れるほどの悲しさがあっても、帰ってくる時の子どもの成長を思えば、送り出すことができたわけです。私どもは今でも、この当時の出来事の中に、このプログラムの原点を見ることが出来ます。

「何故行くのか?」「ホームステイとは一体何なのか?」「ホストファミリーとは?」「真の相互理解とは?」などの様々な疑問を、参加する側も、ホームステイ主催者側も、もっと真剣に受け止め、考えてみる必要があるのではないのでしょうか。「行きたいから行く」「子どもが行きたいというから行かせる」という考えではなく、「生徒はどのような目的で行くのか」「保護者は、どのような目的で行かせるのか」という視点で考え、ホームステイ主催者は、「ホームステイを通して、生徒、学生に何を学ばせ、何を伝えさせるか」という具体的な視点が必要になってくると思います。

ホームステイとは、「文化的戦場」です。異なる文化を持つものが、共同生活をすれば、そこに摩擦や不適応が発生するのは当然です。ですから、参加者は、表面的に外から眺めるだけの観光旅行とは、根本的に異なるものであるという事を知らなければなりません。言葉も違う、他人の家庭に入り、共に生活する事がホームステイなのであり、その方法で異文化を学習するので、それは不自由な生活を常態とするものであると考えなければなりません。そして、同時に、彼らからすれば、参加者を通して、日本人を見、日本を知るという事に他なりません。つまり、参加者がアメリカにホームステイに行くという事は、日本人や日本を見せに行くという側面をも有しているのです。

センターでは、真のホームステイとは、参加者にとって「環境に適応しなければならない不自由さ」、「言葉が自由に使えないいらだち」、「日本の家族や両親と会えない孤独感」、「他人の家庭で生活する不安」などの幾多の困難が待ちかまえており、それらの苦難をどのように乗り越えて行くかが、ホームステイの最も価値ある側面であるとの認識を持っております。困難があるからこそ、「かわいい子には旅をさせよ」と言い続けられているのであって、観光旅行やお買い物ツアーに、保護者が金銭的負担を負ってまで、旅をさせる意味などないのではないのでしょうか。

参加者には、いつも「学習する姿勢」を求めます。それは、「机上における学習」ではありません。「異なる文化を観察し、異なる価値観を理解し、異なる言語を使う体験学習」です。他人の家庭で過ごす事による「精神的自立」と「社会性」を養う体験学習でもあります。これらのセンターのホームステイ理念を、充分にご理解いただき、その認識の上に立って、ご参加をご検討いただきたいと思います。

参加する皆さんへ

南日本カルチャーセンターのホームステイプログラムは、1974年に始まりました。おそらく、日本全国で行われている数多くのホームステイの中で、最も歴史の長いホームステイプログラムの一つだろうと思います。1974年に大学4年生で参加された先輩は、70才を越える年齢になられますし、今年度、参加する皆さん方全員が、生まれる前からあったことを考えますと、プログラムの歴史を理解できると思います。また、歴史だけでなく、これまで参加されました、皆さん方の先輩は2万人以上となり、一つのプログラムの参加者数としましても、おそらく、日本有数の、ひょっとしたら、日本で最も参加者数の多いプログラムかもしれません。さらに、このプログラムに参加された先輩方で、その後、高校留学された方、大学留学された方、語学留学された方など、合計すると数千人を超えており、現在でも、社会的に様々な分野で活躍され、プログラムをきっかけとして大きく人生や進路が変わったという方々が、たくさんいらっしゃいます。(詳細は、センターホームページの「ホームステイの実態調査」を参照してください。)皆さんは、現在、ただ単に、ホームステイに参加してみようと思っっているかもしれませんが、先輩達の言葉を借りれば、「人生を変えたホームステイ」ということになりますので、ホームステイを実りあるものにするため、申し込まれる前に、しばらく、次のようなことなどを考えてみてください。

このホームステイは、観光旅行ではありません。「体験学習」であり、「人材育成」プログラムです。遊び気分で参加したり、海外旅行に行くような気持ちで、楽しさばかりを期待して、参加しようとしているのであれば、このプログラムは決して満足できるものではないと思います。なぜなら、このホームステイは、生活体験や文化交流による「異文化学習」が、その大きな目的であり、日本の家族を離れ、異なる環境の中で、一人で生活することによる「自立」もまた、目的の一つとしています。ですから、観光をしたり、買物をしたり、いろんなところに遊びに行ったりすることを目的とはしていません。

異国で、異文化の中、英語という道具を使って、他人の家庭で生活することを考えてみてください。おそらく、いろんな出会いがあると思います。いろんな文化の違いも発見できると思います。戸惑いや驚き、動揺も感じるでしょう。いろんな楽しさも体験できるかもしれません。でも、ホームシックのような寂しさも体験すると思います。おそらく嫌なこともたくさん起こると思います。悲しいこと、涙を流したくなるようなこともあるでしょう。そして、ホストファミリーとの苦しくなるほどの別れの悲しみと感動も、このプログラムで体験することの一つだと思います。センターでは、皆さん方の体験する、これら一つ一つの、すべての体験が、学習であると考えています。

いつも「学ぶ」姿勢を持ってください。「何のために、ホームステイに参加するのか」「ホストファミリーに、何を伝えるのか」「自分は、ホームステイで、何を勉強するのか」などという気持ちを決して絶やさないでください。皆さんが体験する出会いも、出来事も、感情も、感動も、参加者によってみんな異なります。各自が自分の体験から、何を学ぶかは異なってきます。そして、自ら考え、自ら学ぶ姿勢がなければ、体験を通して学ぶ価値が半減してしまいます。すなわち、体験という名に値するほどの「価値」を、そこから学習することなく、単なる感情の高ぶりや感想だけで、終わってしまうことになります。これまでの参加者が帰国した後、すなわち異文化体験をした参加者が、自国に帰って、どのような影響を受けていったかを考えてみれば、ある程度、その謎を解くことができます。帰国後の参加者たちは大きく二通りに分けることができます。一つは帰国時に大きく膨らんだ異文化体験の刺激と興奮が、時間の経過とともに萎んで、後には「楽しい思い出」と「また行きたい」という思いが、漠然とした英語や留学に対する「夢」として残るだけのケースです。もう一つは異文化体験の刺激と興奮が、自分の人生に生きがいや目標を与え、日本での生活に前向きに作用し、これまでには見られなかったほどエネルギーで、積極的な言動が生み出されているケースです。センターが参加者に望むのは、二番目のケースに参加者全員がなってもらうことです。

英語が自由に使えない皆さんが学ぶためには、言葉を使うよりも、積極的に、自ら進んで、挑戦、トライするしか方法はありません。体験しながら、学び、考え、反復、修正しながら、身をもって実践、学習していくわけです。この「積極的に、いつでも学ぶことに前向きな姿勢」が、プログラム期間中に最も望まれることなのです。

そして、英語の学習も大切です。センターでは、出発までに皆さんが英語の自主学習をできるように、アメリカの家庭生活で必要とされる、日常英会話文を選定したものを配布しています。参加者は、その会話文を暗記しなければなりません。また、プログラム開始前に、オリエンテーション(事前研修会)を開催し、生活習慣の違い、考え方の相違、比較文化、公共道徳やマナー、危機管理やケーススタディなどを勉強してもらいます。これらの学習を積んでこそ、価値のあるプログラムにつながっていきます。ただ参加するのではなく、事前に多くの学習をして、常に学ぶ姿勢を持って参加して欲しいと思います。



このプログラムの特色

☒ 国際理解の学習の仕方を具体的に指導する

ホームステイに参加するだけで、国際理解学習ができると思うのは、保護者の皆様を始め、学校の先生方、また、数多くの参加者達が考える最大の誤りです。しかしながら、現在でもホームステイに参加しさえすれば、国際色豊かな体験ができるものと、誤解され続けております。ただ漫然と、ホームステイに参加しても、参加者は言葉も理解できない中で、ホストファミリー宅の生活では時間を持て余し、結局は、自分の部屋で過ごすことが多くなり、日記を書いたり、日本に手紙を書いたり、日本の宿題に追われたりする現実が数多くあります。そして、グループの友達や一緒にいる日本人の仲間と過ごすことに喜びを感じます。もちろん、これは日本から留学する多くの学生や社会人の場合でも同様ではあります。センターは国際理解教育の専門業者として、このことは声を大にして申し上げたいと思います。実際に異文化学習や国際理解学習をするためには、事前にその方法の指導を受け、現場であるホストファミリー宅や学校、また訪問先や研修の場において、それを具体的に実践しなければなりません。センターは、オリエンテーションにおいてその異文化体験学習方法まで指導します。

☒ 期間中の様子は、センターのホームページで公開している

期間中、現地での活動内容を、センターのホームページ上で公開しております。内容は、参加者や現地の先生、引率指導者の現地での生活の様子が分かる写真や動画、日記形式の活動報告を中心として、グループごとにアクセスできるようにしています。アドレスは www.mncc.jp です。

☒ 目的は異文化理解と自立に基づく人材育成

このプログラムの目的は、異文化理解と自立に基づく人材育成です。国際交流は手段であると考えており、目的ではありません。日本を離れ、家族と別れ、異言語下の他人の家庭で生活しながら、自己を見つめ、異文化と自文化を考えるためのプログラムです。

☒ 午前9時から午後4時までスケジュールが組まれている

このプログラムは、午前9時から午後4時までスケジュールが組まれております。授業、社会見学、文化交換会、レクリエーション、終日研修と、アメリカの生活を様々な方面から体験できるようになっています。

☒ オリエンテーションが充実している

このようなプログラムで最も大切な事は、説明会やオリエンテーションが、どの程度の時間と内容で行われているかということです。このプログラムでは、事前の説明会、またプログラムが開始する前のオリエンテーションが十分に組まれています。

☒ ホストファミリーはボランティアによる受入れ

一般的に、ホストファミリーには、日本の下宿と同様、お金をお支払いするものと、ボランティアによる場合の2通りがありますが、このホームステイは基本的にボランティアによるファミリーによって成り立っているプログラムです。但し、受入れのために余分に発生する費用の補助が行われる場合もあります。

☒ 危機管理の指導を行う

センターでは、異文化の生活を「文化的戦場」として捉えています。すなわち、ホームステイは「文化的戦場」に赴くことであり、異なることを常態と考えます。そのため、参加者への指導の一つに「危機管理」があります。この危機管理のあり方は、センターが独自に作成したものに基づいて、オリエンテーションで行います。

☒ 教育的なプログラムである

決して観光旅行ではありません。参加者は出発までに課題英会話文を利用して学習できます。また、現地での授業や宿題は生徒のレベルにあわせて行われます。そして、宿題などもホストファミリーと一緒にやるようなものが毎日出されます。

ホームステイを成功させるために

1 参加者が負う責任 — ホームステイの成功とは何か

「ホームステイの成功とは何か」というテーマは、参加者だけでなく、その保護者の方々にも、事前に、ぜひ考えていただきたいことの一つです。なぜなら、その理念が、ある程度、具体的に明確にされていなければ、また、示されていなければ、プログラムの終了後、その体験が参加者の人生にも活かされることなく、ホームステイが単なる「良い思い出」だけで終わってしまうかもしれないからです。当然、参加者によってこの答えは異なってまいります。この設問を多くの参加者や保護者に尋ねれば、大体、次のような考えに要約することができます。すなわち、参加者がホストファミリーとの交流を深め、親密な関係を築き上げ、異文化を学び、英語力を伸ばして、国際感覚を身につけて帰国できたら、それが成功と呼べる、理想的な体験学習のようです。

確かに、要約されたこれらの考えは、ホームステイの持つ成果を集約しているものではありません。しかし、残念なことに、この考えは参加者側から見られたものであり、受入れ側の視点が全く欠落しております。

ホームステイは、ホテル滞在とは異なり、宿泊先はホストファミリー宅ということになります。ホテルに宿泊する時のホテル側の目的は、「金銭による対価」になりますが、ホームステイにおけるホストファミリーの目的とは、何なのでしょう。特に、センターのホストファミリーは、原則として「ボランティア活動」の一環として、参加者の受入れを行います。ということは、ホストファミリーは、何の目的で、参加者のお世話をされるのでしょうか。

つまり、ホームステイには、参加する側と受入れ側の趣旨と目的という、二面性があります。参加する側が目的を持っているように、受入れ側も目的を持っているということです。ですから、参加者がいかに自分の目的が達成され、プログラムに参加して本当に良かったという感想を持っていたとしても、その参加者の受入れ側である、「ホストファミリー」「プログラム関係者」が、果たして参加者と同様の評価を行ってくれるかという問題があるのです。つまり、参加者側の目的が成就したとしても、それではまだ50%の目的達成であって、受入れ側の目的が達成されて、初めて100%のホームステイの成功という言葉が出てくるのです。

ホストファミリーの目的は、「参加者を自宅に受け入れて、体験的に日本人の考え方や文化を理解する。」というところにあります。その目的のために、皆さんを自宅で受け入れるのです。では、彼らの目的達成のために、何が必要であるかを考えてみてください。そうすると、それは参加者の協力なくしては不可能だということがわかります。いくら彼らが努力しても、受け入れた生徒が、内気で、消極的で、恥ずかしがり屋で、日本の文化や習慣、日本人の考え方などについて話そうとしなければ、また、紹介する姿勢がなければ、彼らの目的が達成することはありえません。すべては、受け入れる生徒の姿勢と行動次第という受身の立場であることがわかります。つまり、参加者にこれらの姿勢が欠落していたら、自分たちのボランティア活動によって得られる達成感というもの半減してしまうのです。ホームステイが単なる観光旅行ではないという一つの理由がここにあります。ホームステイは、ギブアンドテイクであり、ホストファミリーに対して参加者が負うこのような責任というものがあるということです。それは二つあります。一つは、いつも日本の紹介を行おうとする姿勢と実践です。もう一つは、異なることを受け入れようとする姿勢とホストファミリーに対する感謝です。もし、あなたがホームステイに参加しようとしているなら、これを実践することができますか。このプログラムでは、それが問われます。

2 ホームステイを成功させるために

① オリエンテーションの指導を実行すること

センターではオリエンテーション（事前研修会）をプログラム開始前に実施します。このオリエンテーションでは、ホームステイ全般にわたる指導やグループ活動上の指導、ケーススタディを行います。また、参加者は徹底した異文化学習の指導と自文化紹介のための方法と、そして、ホームステイにおける学習の仕方や危機管理などを身につけます。このオリエンテーションの内容を忠実に実行すれば、成果の多い異文化学習が体験できます。なお、当日の参加が不可能な場合は、オリエンテーションの録画などを用いて対応します。

② できるだけ英語の勉強をしておくこと

センターでは、申し込まれた方々に暗記用の英会話文が掲載されたガイドブックをお渡ししております。ホームステイ期間中に必ず一度は使うという重要な英文ばかりですから、出発までにこれらの英文を覚えておくとう便利です。以前は英語が苦手な生徒も参加していましたが、この英文を覚えて参加することによって、十分にホストファミリーとの生活を楽しんでいました。ホームステイに参加するからといって特別に英会話学校に行く必要はありません。この暗記用英文（ホームステイイングリッシュ）を全部覚えてしまえばいいのです。そのためには、早く申し込む必要があります。

③ 早くから準備すること

このプログラムは観光旅行ではありません。立派な民間外交の役割を果たしています。ホテルではなく、一般の家庭で生活するのですから、ファミリーは皆さんを日本人の代表としての眼で見るとのことです。ですから事前の準備は大変重要です。早く申し込む必要性は前述の通りですが、英語だけではなく、文化や生活習慣の違い、その国についてなども知っておく必要があります。また同様に、日本のことについても学んでおく必要があります。これらの事は、参加する皆さんが観光ではなく、勉強する目的で行くのだという心構えを持つ意味でも大事なことです。

④ 積極的にトライすること

ホームステイ期間中は、受身の立場で生活してはいけません。受身の生活は観光旅行を意味するものです。他人がしてくれるのを待つのではなく、主体的に生活してください。「～される」のを待つのではなく、「自ら進んでトライする」という気持ちを常に忘れないでください。遠慮してはいけません。引込み思案ではいけません。初めての体験でも、恐れず自主的にやってください。トライする数が増えれば増えるほど、皆さんが体験する数も多くなり、得るものも多くなります。反対に遠慮すればするほど、アメリカでの生活は思い出の少ないものになってしまいます。このプログラムをより有意義なものとするためには、皆さんの積極的なトライなくしては考えられないのです。「考える前にトライすること」、これを実践してください。

⑤ 目的を持つこと

はっきりとした目的意識を持つことは、大変重要です。漫然と参加するのではなく、期間中に必ず成し遂げられるような、目的意識を持つことをお勧めします。例えば、「英語力をつける」という漠然としたものではなく、「毎日一つ新しい英語表現を覚える」というような具体的な目標が大切です。また、学習的な目標より、自分の趣味や特技を生かした目標の方が、効果的です。サッカーの好きな人は、サッカーに関する目標を、手芸が趣味の人は、手芸に関する目標を、ハンバーガーの好きな人は、ハンバーガーに関する目標を立てた方が、実践できる可能性が高くなります。期間中に、必ず成し遂げられるような、実感があるものを目的としてください。

⑥ ギブアンドテイクの精神を持つ

先述したように、このホームステイは、基本的にボランティアによるホストファミリーの受入れによって成り立っております。ですから、参加者側と受入れ側の関係は「Give & Take (ギブアンドテイク) の精神」によって成立します。これは、「一人だけが得るのではなく、両者が得たり、与えたりする」精神を意味しています。つまり、参加者はホストファミリーから、「家庭生活の場」を提供されているのですから、ホストファミリーに対して、常に「ギブ(Give)」する気持ち、すなわち、「自分は何をホストファミリーのためにしてあげられるか」という視点が必要です。この気持ちがある限り、ホストファミリーとの生活はうまく行くはずで

⑦ 参加者の自立と親の自立

参加者は、長期間にわたり、日本を離れ、日本の親元を離れ、米国文化の他人の家庭で、英語を使って生活していかなければなりません。悲しくても、寂しくても、悩みがあっても、ホストファミリーの家には、日本語で相談できる人は誰もいません。孤独な生活環境でも、一人でそれを乗り越えていかなければなりません。このプログラムの最も大事なことは、これらの環境の中、一人でやっていくことなのです。そのためには、お申込みいただいてから後も、ご自宅では、自分のことは自分でやっていくという、「自立」した環境で生活されることをお勧めします。保護者の方も同じです。子離れできない保護者のお子様は、一般的に、親離れできないお子様でもあります。このプログラムを良い機会にして、ぜひ、相互依存の関係から脱却していただきたいと思

⑧ 「はい」「いいえ」の自己主張

明確に、自分の意思表示ができることは、アメリカ社会の基本です。日本の生活に「はい」か「いいえ」の判断を導入することを、強くお勧めします。日本でできなければ、ホストファミリー宅でも絶対にできません。自分の気持ちを「説明」するのではなく、「はい」「いいえ」、「賛成」「反対」、「正しい」「間違い」などの、明確な判断が必要です。普段の日常生活の中に、自分で判断し、それを意思表示し、その結果責任を自分で負うという環境を持ち込まない限り、いつまでたってもできるようにはなりません。アメリカで家庭生活を送るための、必要最小限の準備の一つです。



ホストファミリー

このプログラムの参加者は、一般のアメリカ人家庭（ホストファミリー）に滞在し、家族の一員として生活を共にします。ホストファミリーは、基本的にボランティアによるプログラム参加であり、プログラムの趣旨にご賛同いただいた方々であり、現地の地区担当者（ティーチャーコーディネーター）を通して、決定されています。「自由と平等」が合衆国憲法で保障されているアメリカにおいては、ボランティアであるということを除けば、ホストファミリーの決定に、家族の経済力、家族構成、婚姻形態、年齢、人種、民族、宗教などのプライベートな要素は、法律に抵触するために考慮されません。最も重視されることは、彼らがいかにこのプログラムの趣旨を理解し、熱意と情熱と愛情を持って、参加者を受入れようとする姿勢が、あるかということです。

ですから、実際にお世話されるホストファミリーは様々です。定年退職された子供さんのいない老夫婦の家庭があれば、ご夫婦と子供さんが11人もいるような大家族もあるでしょうし、母子家庭や、父子家庭もあれば、ご夫婦と幼い子供のいる家庭、さらには、ご夫婦と小さな子供がいて、さらにお母さんは妊娠数カ月というような事例も過去何回もありました。いずれの場合も、地区担当者が、ホストファミリーとして適切であると判断した上での決定です。例えば、日本で外国からの中学生を受入れるホストファミリーを想定した時、上記の例のような家庭で、ホストファミリーとして受入れを行うということは、あまり考えられないようなことかもしれません。中学生を受入れるのだから、中学生のいる家庭がお世話することが好ましいかもしれないと、相手側のことを考え、遠慮がちに、「私どもは70過ぎた子供のいない老夫婦ではありますが、もし、どなたもホストされる方がいらっしゃらなかつたら、いつでもお世話いたしましょう。」というようなお申し出をされるのが常です。それが日本的な考え方であり、日本の文化であり、日本のやり方であり、日本の価値なのです。そして、同様に、アメリカにはアメリカのそれらがあるのです。ですから、日本の常識では考えられないようなことも、異文化であるアメリカでは、価値観の相違から、充分に起こり得ることです。

何故、ボランティアで、全く見ず知らずの外国の生徒を、お世話されるのか、日本人にとっては大変不思議です。アメリカ社会ではボランティア活動を通して、何か社会に貢献しようとする精神があります。ホストファミリーになることもその表れの一つだといえます。実際のホストファミリーに、それらの質問をすれば、次の様な答えが返ってきます。「留学生を通して、日本の文化を学びたい」とか、「自分の子供達に、国際的な感覚を身につけさせたい」「外国人留学生に、アメリカの家庭を学ぶ機会を与えたい」などが一般的に数多く聞かれる意見です。でも、これらの理由の前に、物事を気楽に、楽観的に、挑戦的に考える、好奇心の旺盛な動的国民性がその背景にあります。日本人の用意周到で、真面目に、悲観的に、慎重に考え、結果的に何もしない静的国民性と全く正反対です。ですから、彼らの行動や考え方には、日本人に理解し難いことが数多くあり、このボランティアにしてもその一つといえます。けれども、お互いにほぼ正反対の考え方を持っている国民であるからこそ、お互いの考え方から大いに学べるという、補完的な存在でもあるといえます。

ですから、日本とアメリカでは、家庭における考え方にも、大きな違いがあります。アメリカ人の家庭に行き、そこに滞在することによって、考えさせられることを、皆さん方は数多く発見できると思います。それらを認識した上で、アメリカでの生活をスタートしてください。まず、皆さんに注意して欲しいことは、そのこの家族の一員になることです。これがホームステイを円滑に行う上で、最も大事なこともかもしれません。また、アメリカ人は、子供に対する考え方が、日本人とは一般的に異なっています。日本の家庭では、子供中心の家庭生活が営まれて、過保護な環境にあるため、子供の親に対する依存心は高く、その結果、親離れ、子離れができにくく、子供の自立心も育ちにくい傾向があります。一方、アメリカの家庭では、子供に対するしつけには、厳しいものがあり、幼少時より一個人として尊重され、自己主張できる、自主自立のしつけと教育があります。日本の母親は、たとえ仕事を持っていても、家庭のすべての家事は、母親の使命と考え、一手に引き受けている場合が多く見られます。しかし、アメリカでは、母親であり、家族があつたとしても、他の男性同様、自分の生きがいや自分自身の向上のために、仕事を持ったり、ボランティア活動に参加したり、大学や大学院に通ったりするなど、一人の人間として社会に参画することはごく自然なことです。母親が家庭を留守にする場合は、父親が子供達の面倒を見たり、家事も家族全員で分担し、協力し合って家庭生活が営まれています。家族の一員として生活する以上、参加者も当然それに協力していく必要があります。日本の子供達は身の回りのことを、母親に頼る傾向がありますが、アメリカの価値観では全く相容れないばかりでなく、その考えには全く否定的です。つまり、「自分のことは自分でする」ということが、アメリカ社会の大原則となるわけです。この大原則を中心として家庭生活は動いています。各家庭には、「ファミリーールール」というものがあります。それは、共同生活である、家庭生活がスムーズに営まれるように、お互いの分担や協力内容、守りごとを取り決めたものです。皆さんもそれを早く知り、家族の一員として行動してください。

皆さんが、ホストファミリーを通して学びたいのであれば、様々な彼らの活動に積極的に参加することです。日曜日には家族と一緒に教会に行ったり、教会で催される行事に参加したり、家族の週末の計画や活動に、興味を持って同行したり、食事の後のだんらんには進んで入って入ったりです。英語が分からないからという理由で、すべて引込み思案にならないことです。ホストファミリーは、皆さん方を通して日本の国、日本人の考え方、日本人の習慣、日本人の生活などを知りたがっているわけですから、皆さんもそれに応えられるようにしてください。何事も積極的にトライすることによって、ホストファミリーとのより一層の深い絆が生まれると共に、アメリカの生活習慣、文化、アメリカ人の行動様式、考え方などが、様々な体験によって得られるはずで



☒ ホストファミリーとのかかわり方

ホストファミリーは、各ホームステイ地区のコーディネーターを通じて、日本に関心を持ち、異文化について興味のある家庭の方々に依頼します。ホストファミリーは基本的にボランティアで、皆さんを受入れてくださいます。この善意に応えるように責任ある行動をしてください。特に注意して欲しいことは、お客様という気持ちを捨て、自分では自分でやり、お手伝いなどをしてあげることです。このような気持ちで生活することが、ホストファミリーとの絆をより強めるわけです。なお、ホームステイは原則として一家庭に1人、または2人で滞在します。また、2家庭から受け入れを希望された場合は、前半と後半にわかれて、2家庭に滞在する場合があります。

☒ ホストファミリーが決まるまで

正式に参加申込みをされますと、センターから書類が送られてきます。その中には「ホストファミリーへの手紙」や「ホームステイ申込書」「スナップ写真」など、あなたをできるだけ詳しく紹介するための提出書類があります。これらのものをセンターからアメリカへ送り、各ホストファミリーは、その中から、最も自分の家庭にあった人を選んでいきます。例えば、趣味が一緒だとか、保護者の職業が同じだとか、笑顔の写真がいいとか、そのようないろいろな理由で、各ホストファミリーが、どの生徒を自分の家庭でお世話するか決定していきます。ホストファミリーには、2人の生徒を受け入れることを希望している方もいれば、生徒1人の受け入れを希望する方もいます。

☒ 移動手段について

家庭生活を中心とした時間帯においては、ホストファミリー宅の家族の一員として生活しますので、家族とともに外出する際は、必然的に、ホストファミリーが運転する車に同乗する機会が多くなります。毎日の学校への登下校においても、ホストファミリーの送り迎えのお世話になりますし、午後の活動に伴う研修地までの移動も、ホストファミリーの善意によるカープール（相乗り）に依存することになります。さらに、現地の先生方の運転する車に同乗することも常態化するでしょう。幸いにも、プログラム開始当初からこれまでに亘り重大事故等は発生していませんが、これらの事実は実績となり得ても、将来の安全を保証するものではありません。肝要なのは、参加者自らが、シートベルトの装着等の危機管理を心がけ、傷害保険に加入するなどして、自分でできる対策は積極的にしておくことが、ホームステイや海外で過ごす際のあるべき姿です。



— MNCCジャパンホームステイ —

南日本カルチャーセンターでは2000年以降、20人以上の米国中高生を奨学生として日本に招待しています。エッセイや動画等の書類審査によって選考された奨学生たちは、日本人のホストファミリーと約2週間の生活を共にし、日本での家庭生活や学校生活を体験します。奨学生たちが、これらの経験を通して、日本の文化や習慣、そして日本人に関する理解をさらに深めることがこの制度の目的です。期間中、奨学生は、主に地域の中学校や高校に通い、クラスメイトとして日本の生徒たちと一緒に学校生活を体験します、先生という立場ではなく、同級生という立場の同年代のアメリカ人奨学生の存在が、日本人生徒にとっても、知的刺激や意欲につながり、異文化を学習する良い機会になることを強く願っています。日本の生徒が学生のボランティア活動によって実現する、相互交流としてのこの制度は、極めて意義深いものがあります。センターのホームページ上 (www.mncc.jp) で、このジャパンホームステイに関する内容も公開しておりますので、ご覧ください。また、日本のホストファミリーも随時募集しておりますし、この趣旨にご賛同くださる方からの寄付も受け付けております。



管理運営態勢

① ホームステイ地と出発日の決定

このプログラムの目的は、異文化を実感し、心のふれあいを育てることにあります。そのため、この目的にふさわしい環境の地区を郊外に選定してあります。ホームステイ地は、西海岸を中心として、中西部までに亘る地域で選定されますが、原則として、みなさんの滞在地の選定、及び決定は、性別、学年、県別などの様々な要素を考慮してセンターが行います。その結果、出発日も帰国日の選択もセンターが行うこととなります。

② ホームページ上で、活動状況を常時公開

プログラム期間中、参加者の文化交流会の様子や授業内容、午後からの活動状況を撮影した記録写真を映像ファイルで、参加者や引率指導者、現地指導教師の様子を動画ファイルで、また、引率指導者の活動報告書をテキストファイルにして、様々な情報を下記のホームページ上で、保護者や関係者のために、公開しております。また、連絡事項や活動内容の周辺にある情報提供、事前の準備やもっと詳細なプログラムの内容など、あらゆる情報をホームページで公開しています。URL : www.mncc.jp

③ 病気やケガや有事の対応

病気やケガをした場合、次のような対応がとられます。まず、現地教師と引率指導者の間で、病院へ行く必要性が判断され、必要な場合は、「現地教師」「引率指導者」「ホストファミリー」のいずれかが必ず参加者に同行します。1回の治療で処置が終わるような場合の治療費は、参加者か同行者が現金で支払い、その数日後には、現地職員がその費用を支払者に立て替えて支払い、センター職員が保険会社に保険の手続き処理を行います。参加者や同行者が立て替えられないような金額の場合、センター職員が保険会社と直接交渉します。このようにして、病気やケガが発生しても、現地米国人職員だけではなく、センター職員もその処理にあたります。また、有事の場合に対応できるように、主催者名で参加者全員を対象とした必要最低限の保険に加入しており、その補償額は下記のとおりです。但し、アメリカの医療費は大変高額ですので、病気やケガに対応できるように各自で任意の海外保険にも必ず加入されることを強くお勧めします。(任意保険につきましては、手続書類と一緒にご案内します)

死亡・後遺障害(特別補償2,500万円を含む)	5,000万円
疾病死亡	2,000万円
賠償責任	10,000万円
携行品(免責3,000円)	15万円

④ 安全管理、危機管理の事前学習会での指導

事故や危機を予見したり、その発生を回避することを目的として、安全管理、危機管理の指導を、下記の12項目にわたって実施します。また、過去の参加者達が実際に遭遇したトラブルを、ケーススタディとして指導します。

- テロや暴動への対処
- 自然災害の対応
- 事件や事故の回避
- 健康管理
- 交通規則の違い
- 食事管理
- 緊急事態の自己管理
- 金銭管理方法
- 性に関する危機管理
- 銃社会の危機管理
- 禁止事項について
- その他の危機管理

その他のプログラム条件

下記は、旅行業法等に基づき、参加者に交付する取引条件説明書面および契約書面の一部です。参加申込みに際してはプログラムの実施要綱を十分ご確認のうえ、プログラムの内容をご理解いただきますようお願いいたします。

◆ 募集型企画旅行契約

このプログラムは、南日本カルチャーセンター(観光庁長官登録旅行業第1355号)(以下「当社」という。)が旅行企画・募集し実施するプログラムであり、このプログラムの参加者(参加者が未成年の場合は、その保護者)は、当社と募集型企画旅行契約(以下「契約」という。)を締結することになります。契約の内容・条件は、パンフレットに記載されている条件のほか、本プログラム条件説明書、出発前にお渡しする確定書面及び、当社の「旅行業約款」(以下「募集型約款」

という。)によります。当社は、参加者が当社の定めるプログラム日程に従って、運送・宿泊機関等の提供する運送、宿泊その他のプログラムに関するサービス(以下「プログラムサービス」という。)の提供を受けることができるように手配し、旅程管理することを引き受けます。

◆ 旅券・査証について

このプログラムには、帰国日まで有効な旅券(パスポート)が必要です。

◆契約書面および確定書面

契約書面とは、パンフレット、本プログラム条件書、受諾書をい、確定書面とはプログラム開始前にお渡しする研修日程表と、集合解散の案内書のことをいいます。

◆研修地に「海外危険情報」が発出された際の催行中止について

お申込後、プログラムの目的地に「海外危険情報」が発出された場合は、当社は、契約の内容を変更し又は解除することがあります。外務省「海外危険情報」が「渡航の是非を検討してください」以上の危険情報を発出した場合は、当社はプログラムの催行を中止する場合があります。その場合は、プログラム費用を全額返金します。ただし、当社が安全に対し適切な措置が取られると判断して、プログラムを催行する場合があります。この場合に参加者がプログラム参加を取りやめられると、当社は所定の取消料をいただきます。

◆契約内容・代金の変更

当社は、天災地変、戦乱、暴動、運送・宿泊機関等のサービス提供の中止、官公署の命令、当初の運行計画によらない運送サービスの提供（遅延、目的地空港の変更等）その他の当社の関与し得ない事由が生じた場合、プログラム日程、サービスの内容その他の契約内容を変更することがあります。また、その変更に伴い、プログラム費用を変更することがあります。さらに、著しい経済情勢の変動により、通常予想される程度を大幅に超えて、利用する運送機関の運賃・料金の改定があった場合には、プログラム費用を変更することがあります。増額の場合は、プログラム開始日の前日から起算してさかのぼって15日目に当たる日より前に参加者にその旨を通知します。

◆参加者による契約の解除（取消料のかかる場合）

参加者は、所定の取消料を支払い、契約を解除することができます。当社の責任とならないローン、渡航手続き等の事由によるお取消しの場合も、所定の取消料をいただきます。お取消しの連絡は、当社営業時間のみお受けします。

◆参加者による契約の解除（取消料のかからない場合）

下記の場合は、取消料はいただきません。

- ① 当社によって契約内容が変更されたとき。ただし、その変更が募集型約款第29条に掲げるものその他の重要なものであるときに限る。
- ② プログラム費用が増額されたとき。
- ③ 当社が参加者に対してプログラム開始日の1週間前までに確定書面を交付しなかったとき。
- ④ 当社の責に帰すべき事由により、当初のプログラム日程通りのプログラム実施が不可能になったとき。

◆当社による契約の解除（プログラム開始前）

当社は次の場合は、プログラム開始前に、契約を解除することができます。

- ① 参加者が当社があらかじめ明示した性別、年齢、資格その他の参加者の条件を満たしていないことが判明したとき。
- ② 参加者が病気その他の事由により、当該プログラムに耐えられないと認められるとき。
- ③ 参加者が他の参加者に迷惑を及ぼし、又は団体行動の円滑な実施を妨げるおそれがあると認められるとき。
- ④ 参加者が契約内容に関し、合理的な範囲を超える負担を求めたとき。
- ⑤ 参加者の数がパンフレットに記載した最少催行人員に達しなかったとき。この場合、プログラム開始日の前日から起算してさかのぼって23日目（ピーク時は33日目）に当たる日より前に、プログラムを中止する旨を参加者に通知します
- ⑥ 天災地変、戦乱、暴動、運送・宿泊機関等のサービス提供の中止、官公署の命令その他の当社の関与し得ない事由により、パンフレットに記載したプログラム日程に従ったプログラムの安全かつ円滑な実施が不可能となり、又は不可能となるおそれが極めて大きいとき。
- ⑦ プログラム費用をパンフレットに記載された期日までにお支払いいただけないとき。この場合、参加者は当社に対し、所定の取消料に相当する違約料を支払わなければなりません。

◆当社による契約の解除（プログラム開始後）

当社は次の場合は、プログラム開始後であっても、契約を解除することができます。

- ① 参加者が病気その他の事由によりプログラムの継続に耐えられ

ないとき。

- ② 参加者がプログラムを安全かつ円滑に実施するための引率者の指示に従わないなど団体行動の規律を乱し、当該プログラムの安全かつ円滑な実施を妨げるとき。
- ③ 天災地変、戦乱、暴動、運送・宿泊機関等のサービス提供の中止、官公署の命令、その他の当社の関与し得ない事由により、プログラムの継続が不可能になったとき。

当社がプログラム開始後に契約を解除したときは、当社と参加者の間の契約関係は、将来に向かってのみ消滅します。この場合は、参加者が既に提供を受けたプログラムサービスに関する当社の債務については、有効な弁済がなされたものとします。

◆当社の責任

当社は、契約の履行に当たって、当社又は当社が手配を代行させた者（以下「手配代行者」という）が故意又は過失により参加者に損害を与えたときは、その損害を賠償いたします。但し、損害発生の日から起算して2年以内に当社に対して通知があったときに限ります。手荷物に係る賠償限度額は、参加者1名につき15万円を限度として賠償します。また、参加者が天災地変、戦乱、暴動、運送機関等のサービス提供の中止、官公署の命令その他の当社又は手配代行者の関与し得ない事由により損害を被ったときは、当社はその損害を賠償する責任を負いません。

◆特別補償

当社は、参加者がプログラム参加中に、急激かつ偶然な外来の事故により生命、身体又は手荷物の上に被った一定の損害について、募集型約款特別補償規定により、死亡補償金として2,500万円、入院見舞金として入院日数により4万円～40万円、通院見舞金として通院日数により2万円～10万円、携行品にかかる損害補償金（15万円を限度、ただし、一個又は一対についての補償限度は10万円）を支払います。

◆旅程保証

当社は、プログラムに下記の変更が行われた場合は、募集型約款の規定により、その変更の内容に応じてプログラム費用の1%～5%に相当する額の変更補償金を支払います。但し、変更補償金の額は、プログラム費用の15%を限度とします。また、一つの契約についての変更補償金の額が1,000円未満の場合は、変更補償金は支払いません。

- ① プログラム開始日又は終了日の変更
- ② プログラムの目的地の変更
- ③ 運送機関の種類又は会社名の変更

当社は上記の契約内容の変更が生じた原因が以下にある場合は、変更補償金を支払いません。

- ① 天災地変 ② 戦乱 ③ 暴動 ④ 官公署の命令 ⑤ 欠航、不通、休業等の運送機関等のサービス提供の中止 ⑥ 遅延、運送スケジュール変更等の当初の運行計画によらない運送サービスの提供 ⑦ 参加者の生命又は身体の安全確保のため必要な措置

◆参加者の責任

参加者の故意又は過失により当社が損害を被ったときは、当該参加者は損害を賠償しなければなりません。参加者は、当社から提供される情報を活用し、パンフレットに記載された参加者の権利・義務その他の契約内容について理解するように努めなければなりません。

◆個人情報の取扱について

当社は、お申込みの際に提出された申込書に記載された個人情報について、参加者との間の連絡のために利用させていただくほか、運送・宿泊機関等の提供するサービスの手配、及びそれらのサービスの受領のための手続きに必要な範囲内で利用します。このほか、当社の取り扱い商品のご案内、プログラム参加後のご意見やご感想の提供のお願い、アンケートのお願い、統計資料の作成に、参加者の個人情報を利用していただくことがあります。また、センター職員や関係者等が撮影した画像や動画を、当社ホームページや印刷物等に、本人が特定されない内容で掲載させていただくことがあります。

◆燃油サーチャージについて

燃油サーチャージは、プログラム費用には含まれておりません。利用航空会社により必要となる場合がありますので、プログラム費用と併せてお支払いください。参加者が燃油サーチャージの徴収を理由に契約を解除される場合は、所定の取消料を申し受けます。

◆募集型企画旅行契約約款について

この条件に定めのない事項は、当社旅行業約款（募集型企画旅行契約の部）によります。当社旅行業約款をご希望の方は当社にご請求ください。

語学力について

ホームステイに参加するにあたって、必要とされる語学力とは何でしょうか？例えば、参加資格に英検1級程度の英語力が必要と記載すればどうでしょうか？元々、中学生、高校生で英検1級を所持している生徒なんて、ほぼ皆無に等しいでしょうから、現実的ではありませんし、実際、これまで参加された2万人以上の研修生の中にもいませんでした。もちろん、ホストファミリーにとってみれば、そんな生徒をお世話するのは、この上なく喜ばしいことでしょうが、実際には、そんな英語力のある生徒だったらホームステイに参加することもないでしょう。何故なら、センターのホームステイの目的は「英語学習の動機付けやきっかけ作り」に過ぎないので、語学力の高い生徒が参加するはずもありません。実際、これまでの参加者の英語力の平均を英検レベルで説明するなら、英検3級から4級レベルの生徒がほとんどですから、多くの参加希望者は、ホームステイに参加しようとするとき、英語力が気になって気になってしょうがないのでしょうか。でも、英語力を気にすれば、いつまでたってもホームステイに参加することはできないでしょうし、することもないでしょう。過去の統計からすれば、カルチャーセンターのホームステイで、参加者が最も多いのは、英語学習を始めたばかりの中学生であることが象徴的なことです。

語学力のことを危惧されるのであれば、お世話をする側の立場になって、このような問題は考えていただきたいと思います。つまり、「あなたの家庭で、もし、ホストファミリーとして、アメリカの中学生を1カ月間お世話するとしたら、どのような生徒を最もお世話したくないのでしょうか？」という視点で考えてみるのです。この問いに関する答えは、誰でも考えることができますので、少し時間をかけてでも、ぜひ考えてみていただきたいのです。センターでは、これまで何回も過去の参加者やその保護者に、オリエンテーション会場でお聞きしてきた質問でもあります。この問いに対して、帰ってきた答えで圧倒的に多かったのは、「おとなしい子、口数の少ない子、うんともすんとも言わず、黙っている子、何を考えているかわからない子」というものであり、「語学力のない生徒、言葉が分からない生徒」と語学力を問題にして答えた人は過去50年間でもゼロだったのです。つまり、世話する側は、生徒の語学力などは何も考えてはいないということです。そして、これは今後参加しようとする人への大事なヒントであり、プログラムを成功に導く大切な指摘でもあります。彼らは概して、語学力を生徒に求めているわけではありません。大切なことは、「意思表示をして欲しい」ということだけなのです。確かに、「黙っている子」や『はい』も『いいえ』も言わない子」ほど、世話する立場の人からすれば、お世話しづらい生徒はいないでしょう。

ところで、私たちは日本人であり、日本語を話します。ということは、日本語の運用能力は高いということですが、すべての日本人は、日本語で自分の意思表示ができるのでしょうか？口数が少なく、黙っていることはないでしょうか？相手が親しい人だったら、言わなくても分かってもらえると思っていないのでしょうか？ここまで考えてくると、言語能力があっても、それを使って意思表示をするかしないかは、全く別物だということが理解できると思います。英語も同じです。英語ができる人が必ずしも自分の意志表示ができる人とは限りません。お世話する側が指摘するように、重要なことは、「おとなしい子、口数の少ない子、うんともすんとも言わず、黙っている子、何を考えているかわからない子」では、ホストファミリーは困るということなのです。

世界的に見れば、日本人は、内気で、引っ込み思案であると考えられております。いわゆる、無口で、内気で、消極的で、自主性に欠けて、自己主張しないのが日本人の国民性と世界からは考えられているのです。ということは、これらの属性を持つ国民性の日本人は、ホストファミリー側からすれば、最もお世話したくない方々の集団ということになります。このような指摘をすると、必ずそれに反論する集団が現れ、その理由は英語力がないから、そのような誤解を受けていると言いつつ始めて、そこに逃げ込もうとするのです。でも、外務省の方々ですら、同様の指摘があることを考えれば、決して、語学力の問題ではなく、自主性のなさや内気な国民性は、共通する日本人の人的属性であることが分かるのです。往々にして、英語の先生方は、語学力による問題とされる傾向にありますが、現場で子どもたちをお世話してきた者からすれば、決して語学力には起因していないと断言できるのです。

何故なら、ホームステイ現場では、英語力があるとは思えない中学1年生が、高校生や中学2、3年生以上にコミュニケーションをとって活躍しているのを多くのセンター職員が見せつけられているからこそ、そう断言するのです。ポイントは語学力ではなくて、コミュニケーション能力だということです。言語を使わないコミュニケーション能力は子どもの方が高いのではないかと指摘したくなるほど、英語に関する知識がないほどむしろコミュニケーション能力は高くなるのではないかとセンター職員は考えております。例えば、昔、ホストファミリーに「マクドナルド」が伝わらず、Mの字を大きく空に描いて理解させた中学1年生がいましたが、これが正しくコミュニケーション能力の高さだということです。

Questions and Answers

Q01: 英会話に自信がありませんが。

A01: コミュニケーションで、最も便利で、効果的なものは「言語」です。当然、我々には母国語というものが、その道具を使ってコミュニケーションを図ります。ところが、ホームステイに参加する場合、異言語であるため、その道具を所有していません。だから、コミュニケーションがスムーズにいかないという事実はありますが、全然コミュニケーションができないことはありません。それは、コミュニケーションでは「非言語」によるものが数多くあり、我々は「言語」以上に「非言語」によって多くの情報を得ているからです。例えば、電話を利用してコミュニケーションする場合、そこには「言語」しか存在せず、「非言語」による情報はありません。だから、数多くの誤解が電話でのコミュニケーションで発生するのです。ホームステイの場合、現場に参加者はいます。すなわち、ホストファミリーを始めとするアメリカの人々と、時間と空間を共有していますので、相手に理解しようという気持ちがあり、こちらが伝えたいという意味がある限り、コミュニケーションは可能なのです。ですから、オリエンテーションで、コミュニケーション方法を具体的に指導します。

Q02: 観光旅行とホームステイの違いは何ですか。

A02: 基本的に、「ホームステイは観光旅行ではない」という言い方をしますが、それは、厳密な表現ではありません。何故ならば、実際にはホームステイという滞在方法ではあるけれど、実質的に観光旅行であるというのは、いくらでも存在するからです。すなわち、ホームステイという形を変えた観光旅行であり、ホームステイとは、生徒のための海外旅行というような現状があります。理念的に、「ホームステイは観光旅行であってはならない」という表現が、適切ではありますが、残念ながら、数多くのホームステイプログラムにおいて、現実には程遠いものがあります。観光旅行とホームステイの違いを端的に述べるなら、「娯楽性と教育性」の違いでしょう。観光旅行はレジャーであり、ホームステイは学習なのですが、その線引きがあいまいな状態になっております。センターのホームステイは、教育性を追求する異文化理解研修プログラムですので、娯楽性の持つ「楽しさ」「面白さ」「気楽さ」より、教育性の持つ「厳しさ」「困難さ」「大変さ」に満ちていることをご理解いただきたいと思えます。

Q03: アメリカ以外にプログラムはないのですか。

A03: 結論から申し上げますと、このプログラムでは、アメリカしか取り扱っておりません。しかし、それにはセンターなりの大きな理由があります。ホームステイは、子ども達に信じがたいほどの多大な影響を与えます。ですから、初めてホームステイする場合、その対象国選定は、大変重要なことと考えております。ご存知の通り、アメリカは世界のリーダーシップを取っている国の一つであることは、誰もが認めるところでしょう。政治においても、経済、教育、産業、科学でも、世界の中心地であり、アメリカ抜きで世界を考えることは、現実的ではありません。もちろん、人種や民族問題、犯罪や治安の問題、環境問題、移民問題など、数多くの国内問題をも内包しつつ、世界で有数の超大国としての地位を築いています。一方、日本は、経済においてはGDPベース

で、世界有数の経済大国であり、確かな先端技術を有する先進国家であります。そのような国に生まれ育った日本の若者たちが、初めて海外に赴き、その国の家庭生活や市民生活、社会生活を通して、何かを学び、体験し、刺激を受け、動機づけを期待するのであれば、日本以上の先進国家に行くことの必要性を、センターでは優先順位の一番目に考えているわけです。

Q04: 一人で参加する勇気がありません。

A04: プログラムに参加するためには、二つの要件が必要です。それは、「親が許可すること」「本人に参加する意志があること」です。簡単な要件ですが、親が許可しているのに本人が希望しない場合や、本人が希望しているのに親が許可しない場合が、非常に多いのです。基本的に、前者は「男子生徒」に多く、後者は「女子生徒」に多く見られるケースです。つまり、男子生徒の場合は、親は参加させようとはしますが、本人は行きたくありません。反面、女子生徒は行きたくりますが、親が許可しません。一般論として、親は何故、参加させたいのでしょうか。プログラムの参加に、あなたの両親は何を求めているのでしょうか。おそらく、その必要性を感じているからでしょう。親として、プログラム参加は、子どもであるあなたに必要なことと考えているのでしょうか。もし、あなたに参加する勇気がないとするなら、あなたの親は、その勇気をあなたに求めているのかもしれない。参加するという勇気は、自己との戦いです。これまでのすべての参加者は、この戦いの中で、不安になり、弱気になりながらも、一歩前に進む決断を下したのです。でも、その陰には、一歩前に進む勇気がなくて、後悔した人がたくさんいることをセンター職員は知っております。戦わずして後悔するより、たとえ戦って惨敗したとしても、そこに意義を見つけて前進する、そんなしたたかで、向上的な考え方をしたいと思えます。

Q05: 何年生でホームステイするのがベストでしょうか。

A05: このプログラムの中核にあり、根底に流れているテーマは、「自立」です。その意味では、より早くから参加することで、親からの自立に目覚め、客観的な視点を培うことに役立ちます。このことはプログラムの総論的な成果として指摘できます。次に、参加年齢による効率性を論じた場合、絶対的に、どの学年で参加することが最も得策であるという判断は、極めて困難であり、相対性があります。例えば、中学生での参加は、「英語学習への動機付け」と位置づけられ、基本的に15歳以下のプログラム参加は、一言で言えば「きっかけ作り」でしょう。次に、高校生以上での参加は、実際に英語という言語を使って、「異文化理解」や「英語力の向上」という実質的内容を伴うものへ、その参加目的は変化していきます。ですから、どの学年で参加すべきかとお考えになる前に、何の目的でホームステイに参加しようとしているのかという視点で、お考えになることをお勧めいたします。

Q06: オリエンテーションの内容を説明してください。

A06: オリエンテーションの内容としては、「異文化理解について」「ホームステイの学習の仕方」「危機管理」「出発準備」「集合解散などの説明」「ステイ地について」「異文化摩擦のケーススタディ」「規

則や注意事項」「グループ学習」などが扱われます。

Q07: アレルギーがあるのですが、大丈夫でしょうか。

A07: アレルギーには、食物アレルギーや動物アレルギー、金属アレルギー、気管支喘息、小児喘息、じんましん等、様々な種類があるようです。例えば、ほとんどの一般的な米国家庭では、猫や犬を始めとする何らかのペットを飼っていますので、動物アレルギーを持つ人は、その症状が発生するかもしれません。また、食物アレルギーのある人は、自分で特定された食材を管理できるでしょうか。もちろん、事前にホストファミリーにアレルギーのある食材を連絡することで、そこでの食生活はある程度協力してもらえるのですが、日中の活動中にレストランやファーストフード店で食べる食材を、言葉の不自由な未成年の参加者たちが管理できるかと言えば、大変なことかもしれません。結局、ホームステイ期間中の私生活の部分は、参加者の自己管理に委ねられることとなります。アレルギーの症状は個々に異なるでしょうから、各自がその症状の内容や程度や状態を勘案して、判断されるしかありません。また、症状の内容によっては、現地受入機関から医師の診断書の携行を求められたり、ホストファミリーを手配するための別途費用を請求されます。但し、アレルギーによるアナフィラキシー、及びアナフィラキシーショック症状がある方は、参加資格に抵触することになります。(Q12を参照)

Q08: 学校の宿題を持っていくことができますか。

A08: 宿題を持って行っても構いません。でも、実際に宿題の時間を確保するのは、難しいのが現実のようです。もちろん、往復の飛行機の中や、自宅で夜寝る前にやることは物理的には可能でしょうが、実際に参加した先輩たちは、宿題をやる時間は足りなかったと言っています。また、教材関係の本は意外と重たいので、国際線受託手荷物の重量制限も考慮しながら、必要に応じてご判断ください。

Q09: 携帯電話を持参することができますか。

A09: このプログラムでは、携帯電話を持参することは、禁止されています。最大の理由は、ホストファミリー宅で、携帯電話を使ってSNSやネットサーフィンに一人向き合う時間は、ホストファミリーとのコミュニケーションを拒否していると捉えられるからです。そして、その中毒性から、長期の大学留学ですら、英語習得力が低下しているのも、スマートフォンで過ごす時間との関連性が指摘されています。結局、携帯電話と向き合う時間は、日本文化圏の中で生活していることと変わりはなく、プログラムの本質的な目的や趣旨にも影響しかねないことです。そのため、本プログラムでは携帯電話やスマートフォン等の通信機器の持参を禁止しています。

Q10: ホームステイ地を希望できますか。

A10: 原則として、ホームステイ地は希望できません。なぜなら、このプログラムは観光旅行ではなく、異文化学習を目的とするホームステイプログラムであり、観光旅行のように、希望の訪問先へ行くということが目的ではないからです。センターでは、参加者の性別、学年などを考慮して、適正配置しております。もし、特別な理由で、ステイ地を希望されることがありましたら、担当者にご相談ください。

Q11: 現地での授業はどのような内容ですか。

A11: 終日研修日を除く、平日の午前中は、毎日、正午ま

でアカデミックセンターで授業が行われます。この授業は、現地の先生が担当し、引率指導者は助言程度で、オブザーバーとして授業に参加します。授業の内容は、英会話を教えるものではなく、お金の説明など、毎日の家庭生活に役立つようなアメリカの文化や習慣の紹介を扱ったプログラムです。また、授業の最後には、毎日宿題が出され、その内容は、ホストファミリーと一緒にやらなければならないようなものになっています。そのねらいは、宿題を通して、生徒にホストファミリーと会話や交流をさせようということにあります。

Q12: 参加資格に抵触する規定には、どのようなものがありますか。

- A12:** ① 参加者が生死にかかわる健康上の問題を抱えている場合、及びその可能性がある場合
② 参加者が国際理解や国際交流活動に主体的に参加するのが困難と判断される場合、及びその可能性がある場合
③ 参加者に日常生活上の自立が見られない場合、及び他者の支援や特別な配慮を必要とする場合

上記が、参加資格に関する、センター及び現地受入機関の判断基準になります。主に未成年である参加者を、保護者が側にいない他国においてお世話する以上、生命に関わるようなアレルギーや持病、または何らかの障害をお持ちの場合は、慎重に対応せざるを得ません。例えば、食物アレルギーや動物アレルギーなどにおいて、アナフィラキシーショックなどの重大な症状を引き起こす場合は、参加をお断りしなければなりません。また、てんかん、躁うつ病、自傷行為、重度の喘息が見られる方も、現地受入機関の指示により参加できません。なぜなら、このプログラムが、基本的にボランティアの家庭に滞在しながら、異文化を学習し、国際交流を行うということ、また、参加者が家庭生活や地域社会で活動する際に、日本の文化や価値を紹介したり、逆に、同様のものを米国から吸収する等の国際理解の活動を行うこと、そして、お世話して下さるホストファミリーの家庭において、日常生活上での自己管理ができることなどが、必須となってくるからです。何か参加者の参加資格上のこと等でご心配な点がございましたら、申し込まれる前に、必ずセンターにご相談ください。

Q13: 参加資格の中にある規定とは異なり、日本の国籍以外に外国の国籍も持っているのですが、参加できますか。

A13: このプログラムでは、日本人の視点から相対的に異文化を学習するために、日本の文化や慣習、生活様式に一定水準の理解があることを前提として、オリエンテーションでの指導を行っております。したがって、センターでは一つの基準として、日本国籍を有する方を参加資格として挙げております。つまり、日本の国籍を有していれば、二重国籍の方でも参加できる場合があります。これまでの参加者の中には、「日本とアメリカ」などの二重国籍を有する方々も少なくありません。ただし、国籍によっては、アメリカ入国において査証（ビザ）取得が求められることがあります。もし、二重国籍や外国籍に関してご心配な点がございましたら、お申込みの前にセンターまでご連絡ください。

Q14: 治安は良いのでしょうか。

A14: ステイ地の選択については、センターのこれまでのホームステイ実績を活かして、特に考慮されていません。参加者が安全、かつ快適に生活できるよう、郊

外にステイ地を設けてあります。しかし、この質問の中で最も大事なことは、「危機管理の指導」にあるとセンターでは考えております。自国が極めて安全な環境であるがゆえに、我々日本人は、海外でも同様の感覚で過ごしてしまいがちです。そのような意味と、そのような姿勢でいる限りは、治安が良いと答えられる海外は、現存しないのかもしれませんが。このような視点に立って、センターでは「危機管理の指導」に徹底したオリエンテーションを開いております。特に、これまで参加した先輩達が引きおこしたトラブルをケーススタディとして学習し、どう行動すべきであったかを指導します。これまで2万人を超える参加者が何ら事故、事件に巻き込まれることなく、プログラムが運営され続けていることも、このような理由に基づくものと考えております。

Q15: ホームシックは、どうすればいいのでしょうか。

A15: ホームシックといっても、人それぞれに症状は異なります。単なる、「日本が恋しい」「日本食が食べたい」「お母さんに会いたい」というような気持ちは、ほとんどの参加者が期間中に一度は思うもので、むしろ自然なことですので、この程度で心配することは何もありません。ところが、これらのものが、「食事がまったく喉を通らない」「ふさぎこんで、無口になったり、問題行動を起こそうとしたりする」「泣きわめく」などと、段階的に異なる症状に発展していくことが見られます。通常は、時間の経過とともに症状は軽減していきますが、これが長引くようだと、異なる問題に発展することがあります。つまり、泣きじゃくり、ふさぎ込んで、話をしようとしめない参加者の有様に、周囲の者は振り回され、お世話する側が閉口してしまい、ホストファミリー宅を出るという事態が起こるのです。このような重度の事態になると、途中帰国という判断も現実になります。ホームシックを治す薬はありません。唯一、異文化に適應する努力だけです。

Q16: おこづかいは、いくら必要ですか。

A16: 南日本カルチャーセンターのホームステイプログラムは研修です。従って無駄使いは厳に慎んでください。高額のお金の所持はトラブルの原因となります。以上の事から、センターでは各プログラムの研修期間を考慮して下記の金額を最高額としておりますので厳守してください。

【春・冬】	【夏】
中学生 200ドル	中学生 300ドル
高校生 200ドル	高校生 400ドル
大学生 200ドル	大学生 400ドル

Q17: 期間中、現地の様子がわかりますか。

A17: ホームステイ期間中、センターでは現地の様子を、センターのホームページ上で公開しております。グループ活動の様子を日記形式で報告し、写真もグループごとに、掲載いたします。また、引率指導者や現地の先生、参加者の様子などもグループごとに動画ファイルにして、日本の保護者や関係者の皆様をご覧いただけるようにしてあります。過去のものは、現在も公開中ですので、ご参考までにご覧ください。
URL:www.mncc.jp

Q18: 申込み後、どの様な準備をしたらいいのですか。

A18: 申し込み手続きをされてから、皆さんがやらなければならないのは日米に関する事前学習や英語の勉強です。申し込み後、センターからガイドブックが送られてきますが、それを利用することで、日米について下調べがしやすいようになっています。また、皆さんがホームステイ

イ期間中、必要と思われる英会話文を掲載してあります。もちろん、発音例を録音したCDもお渡ししますので、出発までにこの英会話文を丸暗記するよう心がけてください。特別、英会話学校に通う必要はありません。なお、研修準備や、おみやげ・旅行用品などに関しては、オリエンテーション（事前研修会）を開き、その際に詳細を説明しますので、それまでは、日米に関する事前学習や英語の勉強を除いては、一切準備されるものではありません。但し、申し込み後にセンターから渡される正式書類は、指定された期日までに必ず提出してください。また、旅券（パスポート）申請はなるべく早くにお済ませください。

Q19: ホームステイ期間中、いろいろなトラブルが発生すると聞きましたが、本当ですか。

A19: 本当です。カルチャーショックやホームシック、病気や怪我など、トラブルは大なり、小なり、必ず発生します。ですから、異文化学習においては、「始めに問題ありき」という考え方が、センターにはあります。しかし、このトラブルを恐れるより、トラブルから何を学習するかという姿勢の方が大事です。つまり、ホームステイに参加するということは、この異文化ならではの違いに対して、どう対応するかなのです。その違いに対して戸惑いながらも、刺激を受け、好奇心が生まれ、さらなる興味を抱けば、そこには知的向上心や自主性、問題解決力が生まれます。参加者がこの方向へと流れていけば、トラブルを自覚することはありません。ところが、もし、その違いに戸惑い、閉口し、不快に感じ、排他的になれば、異文化での生活には苦痛が伴いトラブルとなり、周囲の方々を巻き込んでいきます。不測の事態として、万が一、持病や体調の急激な悪化、異文化生活への過度の不適應など、様々な症状を理由に、参加者の安全上、プログラムを続けることが困難な状態が起こった場合、早期に帰国するという対応がとられる場合があります。この場合、あらかじめ出発前に予定された旅程を変更して、新たに発生した費用は、保護者のご負担となることをご承知ください。

Q20: 詳しくプログラムの説明を受けたいのですが。

A20: プログラムの全容は実施要綱、資料編に詳述されております。したがって、両方を熟読いただければ、センターから改めてご説明する必要はございません。もし、お読みいただいた上で、何かご不明点がございましたら、各県の担当者が個別にZOOMや電話などでご説明させていただきますので、お気軽にご連絡ください。



プログラムを終えて

～参加者のアンケートから～

※原則的に、二人以上の複数回答のみを掲載しています。多数と追記されているものは、五人以上の複数回答を意味します。

■プログラムを通じて何を学んだか。

- 携帯電話を持って行かなくても、コミュニケーションがとれた。(多数)
- 友達や親の大切さ。(多数)
- 自分のことは自分でするという事。(多数)
- 何事にも挑戦する心。(多数)
- 家族の絆や、家族愛。(多数)
- 英語のヒアリングがかなりついた。(多数)
- 人に優しくすること。(多数)
- 言葉で相手に伝えるということ。(多数)
- 日本とアメリカの文化の違い、生活の違い。(多数)
- 言葉は通じなくても、心が通じ合えば大丈夫。(多数)
- 努力すれば必ず「結果」がでること。
- アメリカの良い所と悪い所、同時に日本の悪い所と良い所。
- 百聞は一見にしかずということ。
- 自分が井の中の蛙だったということ。
- 自分のことは自分でする。
- 言うべきことは、言わなければならないということ。
- 自分のためではなく、人のために行動するという事。
- キリスト教を体験することで、他人を尊重することを学んだ。
- 何故、英語が必要であるかということ。
- 自分が今何をすべきかということを学んだ。
- ルールを守ることの大切さ。
- ホストファミリーの愛情の深さ。
- 日本がどれだけ小さいかということ。
- 愛について学んだ。
- 人種は違っても同じ人間だということ。
- 「自分」をしっかり持たなければいけないということ。
- 常に感謝の気持ちを持つこと。
- 自分が笑顔だと相手も気持ちがいいということ。
- 問題にぶつかった時、立ち向かう勇氣。
- 他人の親切、親の親切を学んだ。
- 英語が通じることの喜び。
- 自分の視野の狭さを痛感した。
- 友達はとって大切であるということ。
- 人間の素晴らしさを学んだ。
- 自然を大切にすること。
- 簡単にあきらめないという心。
- 伝える気持ちがあれば、コミュニケーションができるということ。
- 何事もよく考えて行動すること。
- 助け合うことの大切さ。
- 人間、言葉じゃない。
- 自分で抱いた意志を、他人によって変えない。
- 信頼したり、信頼してもらえることの大切さ。
- 何でも許せる心の広さ。
- 大切なのは、言葉ではなく、思いやること。
- 自己主張の大切さ。
- 何でも興味を持つことの大切さ。
- 英語は勉強ではなく、コミュニケーションの手段であること。
- 自分の考え一つで、良くも悪くもなるということ。
- 意見を持つことの大切さ。
- 自分で感情をコントロールすること。
- 隣近所の方々との良好な人間関係のありかた。
- 自分からしゃべること。
- 困ったときでも、がんばること。
- 知識だけではいけないということ。
- 日本という国に誇りを持つこと。
- そのとき、そのときを大切に過ごすということ。
- すべての人が平等であるということ。
- 英語はできる方がいいが、大事なものは人の中身である。
- 笑顔の大切さ。
- 人の話を目を見て聞くこと。
- 一人一人を大切にすること。
- 受身であつたらいけないということ。
- 自立とは何かということ。

■プログラムに参加して、自分が変わったこと。

- 積極的になった。(多数)
- 明るくなった。(多数)
- 親や家族、周りの人に感謝するようになった。(多数)
- いろんなことに対して自信を持てるようになった。(多数)
- 前向きにもの考えるようになった。(多数)
- 家事の手伝いをするようになった。(多数)
- 人前でも、ものおじしなくなった。(多数)
- 人のことを考えるようになった。(多数)
- 英語を学習したいと思うようになった。(多数)
- 他人を思いやる気持ちが出てきた。(多数)
- ありがとうと言えるようになった。(多数)
- 何事にも、トライするようになった。(多数)
- 外国人と話すことに抵抗がなくなった。(多数)
- 自立できるような気がしている。(多数)
- 前より大人になった。(多数)
- よくあいさつをするようになった。(多数)
- 初対面の人でも親しみを持てるようになった。
- 授業中の声が大きくなった。
- 学校で手を挙げるようになった。
- 自分から人に話しかけたり、自分から行動するようになった。
- 「みんなのために」と思って頑張るようになった。
- 新しいこと、初めてのことに度胸がついた。
- 英語を学ぶ姿勢が変わった。
- ボランティア活動に興味を持つようになった。
- 自分が自分らしくいられるようになった。
- 精神的に強くなった。
- 自分で食事を作るようになった。
- いつもニコニコ笑顔になった。
- 自分の考えを表現できるようになった。
- 諦めない、強い心を持てるようになった。
- 「はい」「いいえ」をしっかりと判断できるようになった。
- 最後までやり通すようになった。
- 自ら進んで取り組もうとするようになった。
- 素直になった。
- 優柔不断でなくなった。
- 責任感が出てきた。
- 一人でも行動できるようになった。
- たくましくなった。
- 協調性が身についた。
- 好き嫌いが少なくなった。
- 恥ずかしがらずに、行動できるようになった。
- はっきり言うようになった。
- 何かしら、良い所を見つけれられるようになった。
- 心が広くなった。
- 自然に笑えるようになった。
- 自分の人生そのものが変わった。
- 勉強熱心になった。
- 友達をたくさん作りたいと思うようになった。
- 英語の時間が楽しみになった。
- 両国の価値観の二方向から見ることができるようになった。
- 自分で考えて行動するようになった。
- 海外に目が向くようになった。
- オープンになった。
- 英語を話すことを恐れなくなった。
- 顔の表情が豊かになった。
- 物事を大きく捉えられるようになった。
- 死ぬほど悩んだりすることがなくなった。
- 生きていることに感謝するようになった。
- 愛の意味がわかりかけてきた。
- コМПレックスがなくなった気がする。
- わからないことは聞くようになった。
- 勇氣と根性が身についた。

これまでの引率指導者

Table listing names and their associated years, organized in columns. Includes names like 山鹿中, 豊見城高, 清清水中, etc., with years ranging from 1987 to 2024.

米国国務省人物交流計画に基づく 米国公立高校交換留学

このプログラムは1961年に米国国務省により定められた「青少年の教育文化交流に関する規定」に基づいて企画され、実施するものであり、米国公立高校への正式な留学制度です。その目的は、日米両国民の友好と親善を深めると同時に、青少年の国際人の育成を目的としております。

☒ 留学内容

8月下旬に出発し、アメリカの一般家庭にホームステイしながら、米国高校交換留学生として、約10カ月間米国公立高校に在籍し、異文化交流、相互理解を行いアメリカの高校生と一緒に学習し、単位を取得する。

☒ 参加資格

- 1 出発時、15歳以上18歳以下の高等学校第1学年、第2学年、第3学年に在籍する生徒
- 2 中学1年次以降における学校での5段階評価がいずれも3以上であること
- 3 心身ともに健全で、異文化理解の習得に熱心であり、交流体験を真に希望する者
- 4 出発までの事前学習を終了できること
- 5 オリエンテーションの内容を修了できる者
- 6 参加者、保護者とも、パンフレットの内容と配布された資料を十分に理解し、センターの指示・決定事項を遵守できること
- 7 出発までに、ELTiSで212以上のスコアを取ること
- 8 不登校歴がないこと

◎ 実施要綱、資料編をご希望される方は、「南日本カルチャーセンター高校留学係」までご連絡ください。



↑
(詳しくはこちら)

参加者へのアンケート

■留学生のあるべき姿とは、どのようなものだと思いますか？

- ・何に対しても積極的でなければいけない。
- ・常に自分の留学の目的を持つべきだ。
- ・いつもいろんな人に対して感謝の気持ちを持つこと。
- ・人それぞれにいい所、悪い所もあるから、みんなの事を好きになれるよう努力すること。
- ・「待つ」のではなく、「自分から」という心構えで友達と接したり、授業を受ける。
- ・自分の国、文化に誇りを持つこと。
- ・「留学生だから」という甘えは持たない。
- ・辛くても投げやりにならない。目の前の問題から逃げない。
- ・「自由」の意味を勘違いしないこと。なんでも好きなことをしていいのが「自由」ではない。
- ・落ち込んだっていい、そこから立ち直ればいい。
- ・小さなことでめげない、強い人間になる。
- ・相手に求める前に、まず自分自身のことを振り返ってみる。
- ・自分の行動に責任を持つこと。

■日本と米国の高校における違いは何だと思いますか？

- ・アメリカの高校は、日本よりもっと先生と生徒の関係が近いが、でもその為に、生徒が先生に対して失礼と思われることもしばしばあった。
- ・米国の高校は生徒に全ての判断を任せ、個性を伸ばすことに重点を置いている。
- ・日本人は依頼心が強く子どもっぽいのが、米国人は独立心が強く大人である。
- ・日本人は物知りでも自己主張ができない。アメリカはその逆。
- ・授業中、先生とのやり取りが多い。何を質問しても、先生は怒らず聞いてくれる。だから授業中寝てる人もいない。
- ・エッセイやレポートなど、自分の考えをまとめる宿題が多いのがアメリカの高校。
- ・米国には、積極的な生徒はどんどん進めるシステムがある。

■この留学で得たものは何だと思いますか？

- ・忍耐力と独立心。
- ・英語力。
- ・日米両国の友人の素晴らしい友情。
- ・生きることの難しさと自己管理の大変さ。
- ・感謝する心。
- ・前向きに考えること。
- ・未来への希望。
- ・自信。
- ・自分をコントロールできるようになった。
- ・笑顔が多くなった。
- ・達成感。
- ・人生を楽しみと思える心。

■これから留学を志す生徒さんに先輩としてのアドバイスをお願いします。

- ・とにかくうるさいぐらい積極的に話すこと。
- ・あんまり力まないで気楽にね。
- ・友達作りに1年間気合を入れてください。
- ・基礎的英語力を身につけておく。
- ・楽しいことばかりではなく、つらいことの方が多いということを出発前に覚悟しておくこと。
- ・アメリカに行っても自分たちは日本人なのであり、日本人としての誇りを持つべき。そして日本に帰っても日本人らしく生きる。
- ・依頼心は一切捨ててください。
- ・アメリカの映画や音楽を見て聴いておくと、話題にもなるし、アメリカそのものを幅広く理解できる材料の1つです。
- ・何でも待ってたんじゃダメ。自分から行くこと。
- ・辛いけど、それ以上に得られるものがある。
- ・分からないことは恥ではなく、当然のことだと頭に入れておく。
- ・自分をしっかり持ち、見失わないこと。そして、自分で道を作ること。

ホームステイプログラム参加申込書

会員コード

太わくの欄は記入しないでください。

県	小	中	高	大	県 番号	小	中	高	大	全 体 番 号	担 当 者 名

※この書類はセンターの管理上の目的だけでなく、引率指導者の指導上の目的のためにも利用されます。

ふりがな			男	生	西	年	月	日
氏名			女	年月日	暦			(満才)
参加プログラム	<input type="checkbox"/> 夏のプログラム		希望発着空港		<input type="checkbox"/> 福岡	<input type="checkbox"/> 鹿児島	<input type="checkbox"/> 那覇	
	<input type="checkbox"/> 冬のプログラム		希望発着空港		<input type="checkbox"/> 熊本	<input type="checkbox"/> 鹿児島		
	<input type="checkbox"/> 春のプログラム		希望発着空港		<input type="checkbox"/> 熊本	<input type="checkbox"/> 鹿児島		
(ふりがな) 現住所	〒 () - ()		都・道 市郡		☎ () () - ()			
(ふりがな) 家族の住所	〒 () - ()		都・道 市郡		☎ () () - ()			
*緊急連絡先	保護者携帯電話： () - () - ()				メールアドレス：			

※センターからの連絡にご対応できる保護者の連絡先をご記入ください。メールアドレスは、小文字、数字、記号をはっきりと区別してご記入ください。

学校名	卒業年月	学校名・学年	
小学校	年 月	学校 年在学中	
中学校	年 月	担任教師	
高校	年 月	英語教師	

写
真
不
要

続柄	氏名	生年月日(西暦)	職業 (会社名及び学校名を具体的に)
父		年 月 日	
母			

手 続 書 類	月 日	渡 送
	月 日	受 領

得意な科目	1. 2.	不得意な科目	1. 2.
趣味		特 技	
長 所		短 所	
持病・既往症	無・有 ()	部 活 動	
英語の成績	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	英 検	無・有 (級)
このプログラムを 何で知りましたか	1. 新聞・ラジオ 2. ポスター 3. ホームページ 4. 先生() 5. 参加者() 6. 知人()		

過去に参加された方を知っていたら その方の名前を記入してください。		受 付
今回一緒に参加される友人がいたら 名前を記入してください。		
申込金	申込金50,000円は <input type="checkbox"/> 年 月 日 () 銀行に振り込みました。 <input type="checkbox"/> 申込書と一緒にセンターに現金書留で送ります。	
旅券	有 ・ 無 ※無の方：旅券申請時に記載する予定のローマ字綴りの氏名を以下にご記入ください。 (例：YAMADA, TARO)	

切
取
線